



濱田 仁¹・木村光子²・村岡大祐³： 御竈神社の藻塩焼神事とアカモク

塩は調味や食料保存に必要で、我々の生活と密接に結びついて来た。日本では岩塩を産出せず塩は海水を濃縮して作った。しかし多雨湿潤な日本では、海水の天日干しや風乾だけでは不十分で、海水を濃縮した鹹水を煮詰めて作った。この海水から塩を作る藻塩焼神事が、宮城県塩竈市の鹽竈神社の末社・御竈神社に伝わる。神社によると藻塩焼神事は、大きな鉄製容器が作れるようになった平安時代末期から鎌倉時代初期にさかのぼり、当時最先端の製塩法を今に伝えるとされる。この神事は毎年7月4日から3日間にわたって行われ、初日は塩釜湾でアカモクを刈り、2日目は松島湾で海水を汲み、3日目は初日刈ったアカモクに2日目汲んだ海水をかけ、鉄釜に受けた海水を焚いて塩を得る。2009年7月に見学したこの神事を以下で紹介したい。

塩と鹽、釜と竈

最初に混乱を避ける為、「鹽」と「塩」、「釜」と「竈」について述べたい。「鹽竈」「塩釜」はいずれも「しおがま」と読むが、「鹽」や「竈」は今日「塩」や「釜」に代用される。

「鹽」は「塩」の元になった字でその成り立ちには複数の説がある。一説(上田他 1963)に依ると偏の「臣」や「土」は家来や武士、隣の「每」の上部は草、「鹵」は天然の岩塩で「口」は恐らくその略字、「皿」は「容器の皿」。従って「鹽」は、草(海



図2 鹽竈神社別宮。楼門を入った正面に左右宮、右手に似た建物の別宮がある。別宮には、塩土老翁神を祀る。

藻)を用いて作った塩を皿に盛り、それを家来が守る様子を表した会意文字で、海水を煮詰めて作った人工の塩を意味し、昔は塩作りに草(海藻)が用いられた事が推定出来る。他説(平島 1973, 押木 2005)では、塩を皿に盛りその上に旗(乍の最後の第五画のない字は旗の意味)を立て、富の象徴であった塩の大量所持を誇り、それを軍臣が守る様子を示す会意文字という。いずれにしても昔は「鹽」が大変貴重で高価だった事が「鹽」の文字に表れている。

また「釜」は煮炊きのカマ、「竈」はカマドの意味である。「鹽竈」は塩を作るカマド、「鹽釜」は塩を煮炊きするカマの意味となる。御竈神社には両者があり、その混用誤用もありややこしい。また漢字制限の為「鹽」や「竈」が一般には使い難くなり、今日「塩釜市」とか「塩釜駅」などと表記されている。簡単にはなつたが意味が曖昧で不正確になった。本稿では神社や神事に関する記述は、意味を区別する為に本字を使い、その他一般名称は簡略化された文字を使いたい。

鹽竈神社と塩竈の歴史

仙台から北へ約15 km, JR 仙石線の多賀城駅から日本三景の一つ松島へ行く途中に本塩釜駅がある。駅から西へ約1 km, 一森山の長く急な石段を登ると、市名の由来となった鹽竈神社(図1, 図2)がある。塩竈や松島は太平洋に面しているが、湾が奥深く、美しい多数の島が自然の防波堤となり、古来、人が集まり港も開けた。縄文時代(約16500年前~3000年前)や弥生時代(約3000年前~1700年前)の貝塚や遺跡も多い。遺跡からは、円錐形で底が薄い塩焼き用の土器が多数出土し、製塩が盛んであった事が分かる(押木 2005, 会田 2007)。この地に大和朝廷が進出し、陸奥國の国府として多賀城が設置さ



図1 藻塩焼神事関連地図。



れると(724)、塩竈は港町として栄えた。多賀城が蝦夷などに對する政治的・軍事的前線基地であったのに対し、鹽竈神社は陸奥國鎮護の一之宮であった。弘仁式(840、黒板勝美・國史大系編修會1974)に「祭鹽竈神斤一万束」(斤は米偏に斤が正字。つまり、鹽竈の神様には、【毎年】稲穂1万束を祭る)と記述があるので、奈良時代の724年以降、平安時代(794-1192)初期の840年迄には創建されていた、かなり勢力のある神社であった事が分かる(押木2005)。今日、鹽竈神社では、正面本殿の左宮と右宮に東北地方を開拓した武甕槌神と経津主神を祀り、右側の別宮(図2)には前記二神を案内した海の神、塩作りの神として敬われる塩土老翁神を祀る。鹽竈は平安貴族の間では景勝地として知られ、源氏物語の主人公・光源氏のモデルと言われる源融が、京都六条河原の白邸に鹽竈の浜を模した庭を造り、難波から海水を取り寄せ、藻塩焼をして楽しんだという話もある(渡辺・西尾1960)。

御電神社

鹽竈神社の末社で、藻塩焼神事の行われる御電神社(図1、図3、現、御釜神社)でも、塩土老翁神が祀られる。御電神社は塩竈市の商店街の中心にあるが、住民は郊外に移り、昔日の賑わいは見られない。松尾芭蕉や弟子の河合曾良もこの神社を訪ね(萩原1982)、境内には「奥の細道」という柱碑もある。現在残る4口の製塩用の竈は鎌倉時代頃(異説あり)に作られたとされる神宝で、「神竈」と呼ばれ、鹽竈神社や塩竈市の名の由来となった。鹽竈神社の伝承では、「昔、鹽竈神社(今の御電神社付近)には7口の竈があったが、その内の3口が盗賊に盗まれ、4口が残った。ところが、盗賊達は逃げる途中で竈を落とし、その一つが、二日目に水を汲みに行く、松島湾の釜ヶ淵(本来、竈ヶ淵か)と言われる。

神事初日(7月4日)、藻刈神事

神事の初日は藻刈神事である。7月4日朝9時半頃、本塩釜駅近くのマリンゲート塩釜(塩釜港、図1)に行くと、港の一番奥に神社や取材のNHK、我々が借りる10人乗り位の発動機付き漁舟が3艘停泊していた。神事舟は神職達に竹や注連縄で飾り付けられ10時頃に出港。神事舟には神職姿の神職2人と、背中に「竈」の字の法被姿で白鉢巻の神職3人が乗り、小雨の中、七ヶ浜町の花淵浜(図1)沖を目指して進み、10時半頃到着。花淵浜は塩釜湾から外洋への出口である。

神事の場所は海岸から50m程離れた沖合で、神職達は藻刈りの海面に舟から二本の竹を斜めに下ろし、斎場を広げた。二人の神職が装束を改め、烏帽子を付けた後、全員が船首に向かって縦一列に並んだ。一人の神職が祝詞を上げて塩土老翁神に神事開始の報告や無事を祈願し、玉串で他の神職を祓い浄め、更

に海に向かって大きな玉串でお祓いをし、お米を撒いた。

約25分の一連の神事後、神職達は長柄の鎌を取り出して海底を探り、藻刈りを始めた。神社ではホンダワラと言うが、数分後上がって来たのは赤いアカモクだった(図4)。アカモクは一度上がり出すと、イモヅルをたぐるように上がる。長持ちに入れ、藻刈りは10分程で終わり、塩釜港に持ち帰る。こうして藻刈りの神事は、往復2時間足らずで済んだ。昔は艫を漕いだので、午後3時頃までかかったそう。このアカモクが入った長持ちは、昔の様に行列を作って午後3時頃港を出発し、本塩釜駅の前や商店街を通り(図5)、御電神社に着いた。神前にアカモクを供える神事を行い、3時半頃に初日の神事は終わった。

神事二日目(7月5日)、御水替(おみずかえ)神事

報告祭と御電の水の汲み出し

2日目の7月5日、午前10時「お竈のお水替え」と「釜ヶ淵でのお水汲み」を、塩土老翁神に告げる報告祭が始まる。白装束が3人、緑装束が2人の合計5人の神職が御電神社に来て手などを洗い浄める。本殿手前左側の神竈収納所の門扉が開き、中にある4口の神竈が見えた。神宝で、一般には公開しないようだ。神竈の収納所は屋根が無いのに、大雨になっても神竈から水が溢れ出る事はなく、日照りが続いても水が枯れないという。また世に異変があると水の色が変じるといふ伝説があり、江戸時代には水の色が変じると領主の伊達藩に報告したそう(押木2005)。

本殿右奥には花淵浜で刈られたアカモクの入った長持ちが供えられ、白装束の神職が一人本殿前に進み出て祝詞を上げ、大きな玉串を持って神竈収納所の前や社務所でお祓いをした後、社務所に置かれた神饌(御神酒・米・魚・海藻・野菜・果物など、神様の食事)を神職5人が順々に手渡しして本殿に備えた。次いで、白装束の神職が二人神竈収納所に入り、一人が桶を差し出し、他の神職が4口の神竈の水の一部を順に柄杓で汲み出し2個の桶に入れた(図6)。最後に、本殿前で祈禱を行い、神饌を元の様に社務所に下げ、報告祭は10時40分頃に終わった。

その後すぐ、神竈は真水で綺麗に洗われ、真水が張られた。

釜ヶ淵でのお水汲み

2日目の午後2時から初日と同じ舟で、松島湾の釜ヶ淵(図1)に満潮時の海水を汲みに行く。15分程で釜ヶ淵に着いた。前日の様に神職5人が斎場の用意をし、神職のお祓いを行い、祝詞を上げた。さらにアマモが浮かぶ海をお祓いし、海にお米と御神酒を奉げた後、樽に入れた神竈の水を木製の柄杓で一杯ずつ汲んで海に戻した。続いて、背中に「竈」と書いた法被に白鉢巻の別の神職3人がアルミ製の大きな柄杓も使って水を

図3-11 御電神社と藻塩焼神事。3. 御電神社。鳥居を潜った参道の奥が本殿で、その直前を左に行くと藻塩焼の行われる藻塩焼小屋がある。本殿のさらに手前左側には、神竈の収納所がある。4. 御電神社の藻塩焼神事の初日。七ヶ浜町の花淵浜沖でアカモクを刈る。5. アカモクの入った長持ちを、港から商店街を通って御電神社へ運ぶ。6. 御電神社の神宝である4口の竈からお水を汲み出す。7. 松島湾の釜ヶ淵で、海水を汲み上げ、お水汲みの神事を行う。8. 竹の質の子の上に広げたアカモクの上から海水を注ぎ、海水を濃縮する。9. 神で海水を濃縮した鹹水をお祓いする。10. 塩を焼く作業。11. 出来上がった「鹽」を皿に盛る。

海に戻し、最後は桶を逆さにして総ての水を海に戻した。

次に、神職達は木製の柄杓で、海水を一杯一杯桶に汲み上げた(図7)。水を海に戻すにも汲むにも、桶は初めからひっくり返したり、直に海水を汲まない。絶景の松島湾に浮かぶ美しい島を背景に、柄杓で一杯ずつ一杯ずつ、優雅に水を海に戻し、また汲み上げる様は、まるで平安・鎌倉の貴族が舟遊びする王朝絵巻を見る様であった。

海水を汲み終わると、斎場の一部を片付け、他の神職の待つ塩釜港に戻り、3時15分頃には海水の入った2つの桶を港に引き上げた。桶を木の棒でぶら下げ、各桶を二人の神職が担ぐ。桶を御竈神社に運ぶ一行は、「釜神社御神事用」と書いた青いのぼり幟を先頭に、玉串でお祓いをしながら進む女性、2つの水桶を担いだ4人、最後に警護とお供を兼ねた4人、総勢10人の神職が、少ない見物人の中、前日同様水桶を御竈神社に運び、3時半過ぎに本殿に供えた。

前夜祭と神楽

夕方5時から、お水汲みを報告する神事が、本殿と神竈の取納所で行われた。釜ヶ淵で汲んで来た「海水」が、新しい真水を張った4口の神竈に柄杓で注がれた。こうして毎年、新しい真水をたたえた神竈に新しい海水が注がれる。

その後、屋台が並ぶ境内の奥の舞台上で神楽が舞われ、地元の人も多数見物に来た。演目は「祓の式」で会場を祓い浄めた後、「神招舞」で神様を招き入れ、「弓取舞」、「滑稽獅子」などを神人和楽の気持ちで楽しみ、「恵比須大國舞」では、観客に御菓子などを振りまくという趣向で、夜8時半頃まで賑やかに続いた。

神事三日目(7月6日)、藻塩焼神事

三日目、7月6日の神事は午後1時から始まり、全国の製塩業者や氏子が参列した。準備整い、三人の神職が一列になって歩き、笙、篳篥しやう ひちりき(縦笛)、龍笛りゆうてき(横笛)を演奏する。次いで、神職達が御竈神社本殿に神饌を供え、祝詞を上げ、神竈の取納所の扉を開け、竈のお祓いをした。

その後、緑色の銅製の壺を三宝に載せ、恭しく神職から神職



図12. 海水の濃縮に使われた箕の子の上のアカモク。

へと手渡し、最後の神職が本殿の前を左に10数メートル行った藻塩焼小屋の、製塩用の竈の前に置いた。壺の中にはモグサがあり、火打ち石で点火する。

藻塩焼き小屋には、直径約1.6mの大きな竈が据えられ、上に直径約1.2m、深さ約20cmの塩焼き用の鉄の釜を置く。その上に一辺が約1.2mの竹製の四角い箕の子を吊るし、更に初日、花淵浜で刈ったアカモクを、二人の神職が高さ20cm程に広げ(図8)、この上から二日目に松島湾の釜ヶ淵で汲んできた海水をかけ、鉄の釜に受ける。神社の説明では、アカモクで海水を濃縮するのだそうだ。次いで、竈の焚き口に4人の神職が円座になって風除けとなり、ひうちいし燧石を切り、火種を壺の中のモグサの上に落とし、扇子で煽り火を大きくし薪に移す。程なく釜の表面から湯気が立ち上り、一人の神職が釜の中に柵をつけてかき回す珍しいお祓いをした(図9)。その後、白い袴を着けた4人の神職が金魚掬いの形をした大きな網で表面に浮いた泡やゴミを取り除き、大きなヘラで釜をかき混ぜ、塩以外の不純物が焦げ付くのを防ぐ。T字型の棒で釜の中をかき混ぜる内に、ザラザラと塩の音がし出した(図10)。こうして、1時25分頃に点火して焼き始めた塩が、2時35分頃には焼き上がり、薄いアカモク色の塩が、恐らく10kg以上、アカモクの塩分濃縮効果なのか、意外にも沢山出来た。塩は富士山のようなかたちに盛られ(図11)、三宝の上に置いて本殿に運ばれた。別の大きな皿にも塩を盛り、参列者に分かち、残りは鹽竈神社に持ち帰り、参詣者にも配られるそうだ。その後、本殿で神事があり、塩の他に御飯・酒・鯛・野菜・果物など他の神饌も三宝に盛って供えられた。

こうして藻塩焼神事が終わった後、藻塩焼小屋の後ろに置かれた箕の子の上の海藻をもう一度真近に調べてみたら、アカモクに間違いなかった(図12)。

やがて神竈取納所の扉が開かれ、三宝に載せた洗米と酒が神竈に入れられ、更に、二日目の朝に汲んだ、神竈の古い水も少しずつ入れられた。こうして毎年、綺麗に洗って、新しい真水を張った4口の神竈の中に、2日目には新しい海水が、3日目には古来の竈の水が、少量ずつ柄杓で注がれる。これは、生命や文化が古い物を受け継ぎながらも、毎年新生して代わる事を意味しているようで、自然の摂理に従う神道哲学の神髄がこのお水替え神事に表されているようである。

この後、儀式の無事終了を神前に報告し、三人の神職が雅楽を演奏した後、神饌を下げた。御神酒と塩が参拜者に配られ、3日間の神事は終了した。因みに、この塩の味は、我々は普通の塩と変わらないと思うが、お世話になった神職さんは甘みとまろやかさがあると仰っていた。信仰の深さの違いであろうか。

その後、7月10日午前10時から鹽竈神社例祭が宮司を含め15人の神職、雅楽を奏する6人の伶人、司会者、それに神社本庁から3人の献幣使が参向し、鹽竈神社別宮、次いで左右宮で厳粛に行われ、江戸時代以来関係の深い仙台藩主伊達家第18代当主、氏子総代、全国の製塩業者など約50人が参列した。その際、御竈神社の藻塩焼神事で作られた塩が、他の神饌と共に鹽竈神社別宮の鹽土老翁神などに奉納され、藻塩焼に関する

総ての神事が終わった。

考察

鉄の釜や竈^{かまど}を使う以前の製塩法は、大体以下の様であると言われる。

乾燥させた海藻（ホンダワラ類）に海水をかけて天日で乾燥し、繰り返し海水をかける。こうして、塩分を濃縮した海藻を燃やして灰を取る。この灰を海水に溶かし、その上澄みを製塩土器に入れ、火で焚き、塩を得る。これが本来の「藻塩焼」で、藻も塩も焼いて人工の「鹽」を作る。

ところが、御竈神社の神事では藻は焼かず、塩分濃縮の為に海水が一度かけられるに過ぎず、濃縮効果は少ない。それにもかかわらず、『藻塩焼神事』と言われているのは、この神事の始まる前の時代の「藻塩焼」文化を受け継いでいるからではないだろうか。実際、塩釜湾・松島湾には多くの縄文時代・弥生時代以来連続と続く遺跡が発見され、塩焼きに使われた製塩土器も多数出土し、東北歴史博物館にも展示されている。更に、製塩土器の近くには、海藻に着生すると言われる微小貝マルテンスマツムシなどが多く発見されるので（東北歴史資料館1988）、縄文時代においても、一部では製塩にホンダワラ類など海藻が使われたのであろう。こうしたホンダワラ類を使った古来の製塩法が、平安時代ないし鎌倉時代初期に起こったとされる鉄製の竈や釜を使った新しい製塩法にも取り込まれ、それが「藻塩焼」という名前を持った神事として今日伝わっているのではないだろうか。

また、この神事の1日目と2日目には、前年に陸で採れた白米や御神酒を海に撒き、その後、藻刈りやお水汲みを行って海藻や海水を陸に持ち帰る。この毎年繰り返される、陸の物を海に捧げ、海の物を陸に運ぶ作業は、海と陸との密な関係とその循環の摂理を表しているように見える。

ところで、この神事で使われたアカモクは、ホンダワラと呼ばれる。しかし、福岡県北部の宗像大社ではゲバサモと呼ばれて古式祭の神饌として使われ、参列者も神と共に食べる（木村・濱田2009）。更に、石見・出雲では、ホンダワラ類はジンバ等と呼ばれ、お祓いに用いられ、食べる（濱田2008a, b）。京都・北陸（能登）・新潟等でもジンバ、秋田ではギバサ等と呼び食べる。山陰地方や北九州ではワカメを刈る和布刈神事があり、ワカメなど海藻に対する崇敬の念がある（濱田2007b）。ウツプルイノリの本場の島根県の十六島ではノリの神様を祀る（濱田2007a）。しかし、青森や、塩竈も含めて東北地方の太平洋側では、本来アカモクやホンダワラ類を食べないし、また海藻全般に対する崇敬の念が薄く、西日本の海藻文化とは異質である。

また、（海藻の生える）海に対する神聖視観も、上記の様に、西日本の日本海側では厚く、海に入って禊も行うが、御竈神社

の藻塩焼神事では逆に、初日や2日目、海に出た際、海に向かってお祓いをしたり、3日目には御釜にある、煮詰める前の海水に杵を浸してお祓いをするなど、ことさらに海とか海水に対する神聖視観はないようである。

以上の様に、西日本で見られる海藻文化と東北太平洋岸の海藻文化は精神的に異質であり、後者はむしろ縄文時代以来の古い伝統的文化を継承し、その一部が神事にも受け継がれているのではないだろうか。

謝辞

本調査では、鹽竈神社の増川元英氏、柏木岳史氏など神職の方々、水産総合研究センター東北水産研究所の石田行正博士にお世話になった。また、グラフィック・デザイナーの伊藤和代氏には地図を描いて頂き、国立科学博物館の北山太樹博士には、原稿を見て頂き、貴重な御意見を頂いた。濱田は、塩釜市在住で名古屋工業大学の隅山兼治博士御一家にお世話になった。これらの方々に厚く感謝したい。尚、この報告は、濱田他（2010）を元にしたものである。

引用文献

- 会田容弘 2007. 松島湾の縄文カレンダー。里浜貝塚。p. 7, 56. 新泉社。
萩原恭男(校注) 1982. 芭蕉 おくのほそ道 付 曾良旅日記 奥細道菅菰抄。pp. 34-35, 101. 岩波書店。
濱田 仁 2007a. 出雲國十六島（うつぶるい）とウツプルイノリ。藻類 55: 121-122。
濱田 仁 2007b. 和布刈神事（めかりしんじ）。藻類 55: 218-222。
濱田 仁 2008a. お祓いの起源ホンダワラ類と出雲の佐太神社。藻類 56: 35-38。
濱田 仁 2008b. 日韓共通の海藻名：モ（藻）とモル（mol）、ソゾとソシル（sosil）について。藻類 56: 83。
濱田 仁・木村光子・村岡大祐 2010. 鹽竈（しおがま）神社末社、御竈（おかま）神社の藻塩焼神事。藻類 58: 49。
平島裕正 1973. ものと人間の文化史 7 塩。p. 199. 法政大学出版局。
木村光子・濱田 仁 2009. 宗像大社の古式祭とアカモク。藻類 57: 7-9。
黒板勝美・國史大系編修會（編）1974. 交替式・弘仁式・延喜式 前編。新訂増補国史大系。弘仁式 p. 15. 吉川弘文館。
押木耿介 2005. 鹽竈神社。222 pp. 学生社。
東北歴史資料館 1988. 『里浜貝塚』宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑北地点の調査VII. p. 35。
上田万年・岡田正之・飯島忠夫・柴田猛猪・飯田伝一 1963. 大字典。講談社。
渡辺綱也・西尾光一（校注）1960. 宇治拾遺物語（12巻15話）。日本古典文学大系 pp. 345-346. 岩波書店。

(¹ 〒 930-0194 富山市杉谷 2630 富山大学医学部保健医学教室, ² 〒 145-0062 東京都港区南麻布 2-14-9-2F (株) IDD, ³ 〒 985-0001 宮城県塩竈市新浜町 3-27-5 水産総合研究センター東北水産研究所)